

# 難病救う愛 映画に

## 岡山の夫婦 回復8年待ち結婚

幻覚や長期の意識混濁、激しいけいれんなどの重い症状を引き起こす免疫疾患を扱った、邦画と洋画の作品2本が16日から全国公開される。発症した女性と、その回復を8年待ち続けて結婚した婚約者の男性の体験など、2本とも実話がベース。近年に原因が分かるまで病名もなかっただけに、モデルとなった男性らは「理解が広がることで正しい診断を受けやすくなり、患者や家族の苦悩を和らげる助けになる」と期待をかける。

疾患は「抗NMDA受容体 近年という。患者会は今年6月脳炎」で、免疫の誤作動による脳の機能低下が原因と判明。邦画は「8年越しの花嫁」(松竹配給)。奇跡の実話(松竹配給)。医師の認知度が高まったのも 岡山県在住の中原麻衣さん



「抗NMDA受容体脳炎」から回復し、長男の碧和ちゃん(中央)を出生した中原麻衣さん(右)。夫の尚志さん(左)は8年間、麻衣さんの闘病を支えて結婚した。岡山県で11月、川平愛撮影

### 抗NMDA受容体脳炎 理解広がる

(35)と夫の尚志さん(37)の体験記が原作で、土屋太鳳さんと佐藤健さんが夫婦役で共演する。

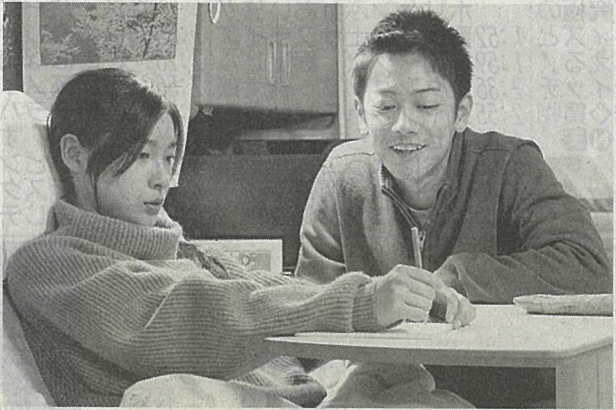
翌春の結婚式を控えた2006年暮れ、麻衣さんは「今日の記憶が全くない」と泣き出したり、不意に「死にたくない」と叫んだりするようになった。麻衣さんは07年1月に精神科に入院、直後から1年半昏睡状態に。意識のないまま激しく手足をばたつかせ、けいれんを繰り返す。原因不明で尚志さんは「何かに取りつかれたようだ」とぼうぜんとした。

麻衣さんは昏睡状態の間にも、一方の洋画は「彼女が目覚めるその日まで」(16年カナダ・アイルランド合作、KADOKAWA配給)。原作は09年、24歳で発症した米国の新聞記者の女性、スザンナ・キヤランさん(32)の実話。幻覚にさいなまれ、会話もでき

卵巣の腫瘍と免疫との関係から、この疾患と診断され、腫瘍の摘出手術を受けた。08年に意識が戻った時には疾患の影響で脳の機能が弱り、会話もできなかった。リハビリを続けて回復し、11年に退院。14年に尚志さんとの挙式を果たした。翌年に長男の碧和ちゃん(2)が誕生した。

当初は精神疾患と診断されたが抗NMDA受容体脳炎と判明。治療を受けて7カ月後に職場復帰した。作品の公開に尚志さんは「病気への理解が進み、私たちのように原因が分からずに苦しむ人たちがいなくなるとほしい」と語る。また、麻衣さんは「病から回復した姿を知ってもらうことで、病気でつらい思いをしている多くの人の力になれたら」と願う。

「彼女が目覚めるその日まで」のワンシーン。会話ができなくなり、医師の診察を受けるスザンナ(右) ©2016 On Fire Productions Inc.



「8年越しの花嫁 奇跡の実話」のシーンカット。昏睡状態から目覚めた婚約者の麻衣(左)の回復を見守る尚志 ©2017映画「8年越しの花嫁」製作委員会

#### 抗NMDA受容体脳炎

卵巣奇形腫などへの免疫反応で作られた抗体が、脳内の神経細胞上の「NMDA受容体」を本来の対象ではないのに攻撃し、脳の機能低下を引き起こす。手足や顔面などが無意識に動く「不随意運動」が特徴。昏睡状態に陥ることが多い。国内では軽症患者を含め、若い女性を中心に年間1000人ほど発症していると推定される。

#### 早く難病指定を

抗NMDA受容体脳炎に詳しい大阪医科大学付属病院の中嶋秀人医師(55)の話。早く診断を受けて適切な治療をすれば回復が早まる。幻覚などの症状を伴うため精神疾患と見分けがつきにくく、治療に時間がかかる場合がある。回復は望めるが患者や家族の負担は重く、早期の難病指定が望まれる。